

町雙六

泉鏡花

一

結ゆひたての圓ま鬚げの艶つやに、色いろの白しろさが、すつきりと尚なほ目め立たつ。お鶴つるは町家まちやの女房にようぼうとて、土地とちの風俗ふうで、等閑なほざりの外そと出でに羽織はおりも着きず、黒くろ縹じゆす子こと八反たんの腹合はらあはせの晝夜ちうや帯おびを引掛ひきかけの帶腰おびこしが二娜ならとして、淺黄あなきの絹縮きぬぢぢみの下したが、褌つまざは捌はく身動みじろぎに縹しゆす子こを、込すへつて媚なまめかしい。

「姉ねえさん。」

「兄にいさん。」

從い兄妹とこで、同年おなじとしだから兩方りやうほうで言交いひかはず。由紀ゆきの之助すけが今年ことしの春はる、久ひさしぶりの歸省きせいに、其その兩親りやうしんの、山やまの墓はかへ詣まうづるのに、恚かうして町まちを連立つれだつて來きた。お鶴つるの其その姿すがたに對たいして、硬こはばつた外ぐわいたう套たうを着きたのが、何どうやら肖そくはないやうに見みえたので、此これから一坂ひとさか山路やまちへ掛かる、丁度ちやうど新地しんちの遊廓いうくわくを出でた處ところ、毘沙門びしゃもんの杜やしうの外そと圍がこひ、石垣いしがきの角かどで、すつぼり脱ぬいで、人形にんぎやうのやうな男おとこの兒こをのせた乳母車うばぐるまの上うへへ掛かけた。

二ふた

歳に成るお雪の子である。

此の乳母車を押しながら、町を通つて、川の大橋を渡る頃から、軽く車の廻るのが面白いのか、何故か、新地を抜けるのにも、お鶴が元來餘り内氣な穏當な方でないから不思議はないが、さつさと急足に成つたので、外套を脱ぐに寒いとも思はないほど身内が温かつた。また雪國には珍しい、暮に降つたのが根雪に成らず、一度雨に消えて、其れからまだ積らない嘘のやうな七草の午時過。

「兄さん、一寸此處で。」

乳母車の番に附いて、待つて居る、とのんびりと霞が懸つて晴れた空を、二つ三つ鳶が舞ふ廓の屋根の上高く、あの暢氣らしい晝ぞめきが、口笛を吹く音のやうな、追羽根の音がカチリノ、と天に響く其を背後に聞きながら、お鶴は新地裏を抜けて急いで歸つた。小菊の花を袖苞に――

「お待遠さま、さあ、参りませう。」

「あゝ、花を買ひに行つておくんなすつたか。」

「私、氣のつかない事をしたんですよ。橋向うだと、些とは綺麗なのがあつたんでせうのに

駄菓子屋の婆さんが兼業なんですから、もう、こんなのばかり、霜げて、乾からびて、葉なんかカラ／＼して

と小指を反らすと、手で裏表、葉を撫でつゝ、俯目に吻と、花に息して温むる。手に羽子板は無けれども、羽子を繕ふ状見えて、紅き唇に觸るゝ時、白の小菊は皓齒の薰り、黄菊映れば何となく鐵漿を含んだ俤して、其の娘の頃、女房ぶり、昔も今も可懐しい。

「此方へ下さい、姉さん 私の方が尚ほ

うつかりして居た。山へ入つて、途中で摘まうと思つてね。」

「何處だと思つていらつしやる 兄さん

が遊んで歩くやうな暖い國ではありませんよ。」
と莞爾しながら眺めるやうに、

「今時分山の中ぢや、石に霜ばかり咲いて居るぢやありませんか。ー そんなに故郷の事をお忘れなさると、また辨天様に叱られますよ。」

「丁ど其處の處でせう。」と乳母車をやゝ仰向けに押上げながら、下搔のおのが褌外れを見るやうにして振返つた。

成程、いま居た毘沙門の石垣の處だつた、と思出す。お鶴は鋭いまで記憶の可い婦である。

「眞個に優しい、綺麗な方だつたんですつてね。」

「西洋の娘を辨天様も妙だけれども丁

ど毘沙門の石垣でね、其處から馬に乗つて、翻然と驅け出した姿が雲に乗つて行くやうに見えたもんだから。――それに、馬が又白かつたんでね。」

「大勢だつたの？ 叱られた生徒さんは。」

「何、八九人さ。基督教の學校で、其時分の事だから。――そして一番若い、下の級も持つて居たのが其の娘さんでね。秋日和に此の山へ入つて、乗走らす、驅廻るで、遊んだとお思ひなさい。野菊だの、嫁菜だの、薄はあるし、束に折つちや徒らに打棄るのを、娘の先生が留めるのを、肯くもんですか。歸途は此の坂が急だから、先生、馬を下りて轡を取つて、いまの毘沙門の石垣へ上つて立つた。足代にして鎧を掛けるのだらうと思ふと。――

(手向けるなり、土産にするなり、いけて見るなり、もしないで、何故、美しい、可愛らしい、可懐しい花を三つて棄てます。戒のために故と

麓まで一度下りた。ー 罰として、草臥れた足で、今から山へ戻つて、投げ棄てにした花を拾つて持つて來らつしやい、私は待つてゝ歸らない。) と言ふのさね。驚きましたよ。蒼空の下に、そら色の服で、すつと立つて、それは美しい氣高い人が、眞面目に涙ぐんで云ふんだから、尊い命令でゞもあるやうに 皆駈上つた、又山へね。中には、口髯の生えたのが居たから可笑しい。

茸狩に競争で獲ものを捜すやうに、各々、然う成ると、血眼で、八を飛廻つて、また不思議に正直に、自分が摘んだ覚えのあるのを探しちや取り、尋ねちや拾つて、申合せたやうに、あの、「岩清水。」のある處へ一人々々寄つたのは、成りたけ萎れない、活々と成つた處を見せようと云ふ了簡です。

ー これを露雫のまゝ、帽に翳し、釦にさし、鞍の前輪に虹に積むと、空色の衣の裳を、薄りと霧にかけて、颯と白馬で毘沙門堂を乗出した。廓の中

を、廂より高い凜とした其の肩を見て、空を行くやうに思つたから、それから辨天様だと言つた。――もう、弗り、皆が、活けも、視めもしない草花を折つて棄てる事と、蜻蛉を縛つたり、蝙蝠を擲落す事を留めたのは、其の人のお庇なんです、とに角

「

手にした手向けの小菊を見つゝ、ふとお鶴の姿を視めた。

「あゝ、呼吸が切れるね、姉さん、私が代らう。」

「何うぞ。」

「乳母車を押す手が、替はる。」

「兄さん、然う云ふ深切も、其の先生に教はつたんですか。」

と、おくれ毛を一寸上げた。

「存じませんな。」

「ほゝゝ、眞個に濟みませんね。」

「何ういたして、光榮に存じます、若様のお守

役。

「まあ、憎らしい。」

「さあ、五本松。―― 此處まで二町には足りない坂だが、随分急だね。」

「うちから、餘程險しい、と思ふのが心に沁込んで居ると見えて、夢を見てね、坂がある、坂は屹と此の坂なんだよ。」

「大きな切立の巖を抱いて木上りをする程に、あとへもさきへも行かないで、びつしより汗に成つて魘される事が度々あるがね。」

「私はね、兄さん、何故ですか、此の坂を、坂、とは見ないで、直立に立つた火の見の階子のやうに思つてね、夢にですよ 矢張り。」

「さうしちや其階子を駈昇つて、城下一面の火の海、炎の波のね、火事を見ることが度々ですわ。」

「あゝ不可い。」
 「由紀が慌だしく、」
 「此處で、そんな事を言つちや、姉さん。」

「小山を切通しの細い石段が、落葉の鱗、青苔の紋」

を染めて、龍の斜めに臥したる状ある、一ツ小山の
頭に、城下十萬軒の門松を取つて、一束にしたるが
如き、根より五株、中空に聳えた松がある。

カチリノ、と、其處とも分かず、高き梢に羽子の
音が幽に響いて、瞰下す町家は、道條も、屋根の數々
も、急に此の緑の影に、薄暗く成つて颯と風。――
魔所なのである。

「落着いておくんない、姉さん、恚う言ふ時は、
 氣を鎮めないで、飛んだ間違ひがあるものですよ。
 今ふつと氣が着いた。――眉毛に火がつく處
 ぢやない、眞個に、姉さんの家の焼けてるのを見な
 がら――氣の着いた、と云ふも變だけれども
 あのね、何故嬰兒を、姉さんなり、私なり
 が抱いて來なかつたらう、と思ふんだ。」

五本松の坂でさへ然うだのに、あれから此方も、
 崩れた崖、石で塞がった路、難儀をして、落すまい、
 轉がすまい、と二人して、かはる／＼、大息吐息で、
 乳母車を此處まで引上げたのは何したのだらう

―

今其の乳母車は、丘一つ小松の中なる、由紀が兩
 親の墓の入口に、標の松の稍丈の高い根に凭掛けた、
 それさへ、凸凹の赤土に轉げさうで危かしい。

「僅かの間だけれども、馬の背を越す處もあつた

し、岩清水の崖下なんぞは、それこそ、劍の刃を渡るやうに、ひや／＼したのに、姉さんも私も、二人ながら、嬰兒を抱かなかつたのは、餘釋變だ。――一人がおんぶなり抱くなりして、一人が空車を引けば目を塞閉いでも來られたものを、笹の根、山のひだに、錦葉を包んだ雪の残つたのを掴んで、いりつく咽喉を露すまでに苦しんで、重荷を押してさ、危い。一つ間違へば、嬰兒に、どんな怪我をさせたか分りやしない。それを、姉さんが汲んで來た水を飲んでも、墓を拜んでも、まだ氣が着かなかつたのは不思議ぢやありませんか。それで居て、城下の町の眞中へ火柱が立つた、あの黒煙。――見える、當方角どころぢやない、屋根、物干も分る、門松も見える、姉さんの家が焼けてる、と成つた、此の言ひやうの無い非常な場合に、夢が覺めたやうに、始めて、嬰兒ぐるみ乳母車を引き上げた事に氣が着いたのです。

魔の所爲だらうと私は思ふ。

あの煙も、小兒のうちによく聞いた、

天狗が驚かすんぢやないかと思ふ。五本松を御覽なさい。――

二人は墓の前を、劃の畝一つ越えて、平地の端へ
出て立つて居る。間は離れたが、下を通つて来た、
あの五本松の梢にイんだ姿である。其の五本の枝は
づれに、城下の町は、川も、橋も、城も森も、天守
の櫓も、處々に薄霞した一枚の繪雙六の風情である。
一人は胡粉で、一人は墨で、男女の名をかけた札が
賽の目に従つて、遊びに出たやうで、はじめ墓の前
の堆い松の落葉に外套を敷いて、並んで坐つて、此
の景色を詠めた時は、五本松の茂の中に、大きな賽
が、ころんと掛つた。
遙かな海へ入方の
陽は、紅で染めた目の一であつた、そして、此の丘
を取巻いた雪の連山は、賽を水晶に輝かした。

長閑に、清く、且つ閑に、恁る景色に對しつゝ、
二人は團栗の獨樂で、手桶から手向けの水を汲み交
した。お鶴は小杯だと言つた。が、やがて考へると
其も希有な事に思はれる。

水は、山の井を、無住に成つた山寺の庫裏から
―― 途中から片寄りに道を切れて、由紀が、前
へ墓所へ来て乳母車の番をして待つ中に、――

片裯端折りでお鶴が一手桶提げて來たのであつた。

「お轉婆な、見て頂戴。」

袂を襷に投上げて、雪なす腕は、つゝむ友染の惜
いばかり美しかった。

其の掌からうけて、飲んだ、また掌でうけて、飲
ました。

「由紀が参りました。」

「をばさん、お久しう」

あゝ、母の石塔は由紀の力で建てるんだ、と云つ
た、其の父も後を追つて　　まだ石堵が立
られない。墓はたゞ松を植ゑた塚なのである。

由紀が伏拝む間を、お鶴は横向きに成つて嬰兒に
乳房を含めた。　　不思議にまだ一度も泣か

ぬ。が、若い母さんが、何故か熟と見てほろりした
のを、男は知らなかつたのである。

時に松風は、二人の外の聲であつた。

「花を兩方へ備へたのが、小菊で拵へたお墓の門

に見えるのね。」

其の外套を敷いた上で、杯は唯二ツ、團栗のころ／＼と崖を落つる數のかさなつた時、お鶴が、ふと然う言つて由紀の顔を見た。

「あけて出て来てくれゝば可いね。」

「兄さん、私は入りたい。」

飲んでた巻煙草を落すと、それが、あの、其の雙六の繪の一個所、――城の大手に縦に並んだ三筋の町の眞中の中ほどへ落ちるやうに見えて、おなじ巻煙草のやうな煙がスツと立つた、と思ふと、線香の動くにおなじ火が見えた。

確かに家が焼けるのである。

烏が飛んだ、雙六の上を亂れて、賽の目の三四、城下を飛ぶ。

霞を拂つて、尚ほ見定めようとして、由紀が劃の畝を飛越える、とお鶴も續いて出て、平地の端に立つたのである。

四

「何しろ、確乎して下さい、姉さん。氣休めを言ふ隙はない。あれ、あゝやつて家は焼けて居るが、今云つたやうなわけだから、これに驚いて慌てたり、駈出したりすると、嬰兒は居る、どんな怪我が無いとも言へないから。」

震へながら縋つて居るお鶴の手を、しつかと取つて、

「大丈夫、氣を鎮めると火が消えるのかも分らない。落着いて、確乎して、」

「兄さん、」

ざり／＼と力が籠つた。

「私、些とも慌てはしませんよ。兄さん。貴方は、今日のお墓参りを済ますと、すぐに東京へ歸るんでせう。」

「今、そんな事を。」

「否、何うしても、何うしても私は分れるのが可厭に成つたから、屹と分れないやうに覺悟して、先刻家を出る時に、土藏の中へ火を伏せて、燃えるやうにして來たんです。——何です、

何だ！ あんな藏。

私が赤い半襟で、か

くれて兄さんに逢つた度に、繼母や、後見人が

（お鶴おいで。） 然う云つちや、押込んで、びし

りと鍵を掛けた土藏だもの。あゝ嬉しい。」

と、よろ／＼すると、枯芝に膝を敷いた。が、火

を、煙を、霞の中に瞰下した山の端に、一雙の瞳の

色は、氷よりも透通つた。雪の顔、緋の唇、由紀が

知つたお鶴の姿に、かばかり美しかつた事はない。

町も、家も焼いた、おわびに――

水へ――

て、天田沼と云ふのをさして、山の深さへ落ちて

行く。―― 唯、五本松の賽は、眞黒な二を向け

て、嘲るが如く、くるりと廻つた。

乳母車の嬰兒が、火のつくやうに、あつと泣く。
 小菊の花を白綾の、霞に縫ったが、墓の前へ、す
 つと立った、端麗なる婦人がある。

「困つた一子へこどもたち。」

二人の行方を見送つた、恩愛の瞳を、また

熟と 嬰兒を抱取つて、清く、朗らかに

に妙なる聾。

坊やお守は何處へ行つた、山を越えて里へ行つ
 た、里の土産に何ももたら、でん／＼太鼓に笙の笛

――

やがて、此の聲に、二人が抱合つたまゝ引戻され
 ると、嬰兒はすや／＼と嬉しさうに眠つて居た。町
 には霞ほどの煙も立たず、お鶴の家なる其の土藏の
 壁の白さ。

音楽の如き羽子の音。

【完】